

天は自ら助くる者を

人見邦明 (東京都荒川区)

六

十五歳、男性、滑落事故で身動きできません。意識はあります。救助隊を要請します」

栃木県警察本部黒磯警察署。携帯電話から風の音がまじった甲高い声が第一報をもたらした。救急救命講習会を受けたことのあるミキが的確に情報を伝える。

「場所、那須岳、標高一六七〇の地点、強風にあおられ岩から滑落……」

岩の下にうずくまっている赤いウェアの男性を発見、大声の私の呼びかけに弱々しく左手をあげてくれた。だが自力では動けない。

「Kさん、そこを動かないで。助けに行くから」と声をかけてから、私は登山道に戻りザイルを持つパーティを探した。運良く重装備の男性三人が下山してきた。

だが、その二十分後、救助している私本人が滑落することになることは。

二月上旬、ミキ、あっちゃん、カト、私の四人は強風を突いて那須茶臼岳往復をめざしていた。ミキは初めての那須カトとあっちゃんは昨年の雪訓で強風にさらされ避難小屋までで途中撤退していた。今回はそのリベンジだ。年長の私がリーダーをつとめていた。

大丸温泉駐車場で身支度、九時二〇分入山。樹林帯は風も弱く、着込んだ

フリースが邪魔になるほどだ。舗装道脇の登山道のトレースを辿り、登山指導センターで休む。下山後は温泉に入ろうね、などと冗談を言いながら強風帯へと突き進んでいく。この日、西高東低の気圧配置で関東地方には強風注意報が発令されていた。今回も避難小屋までの往復かな、と私は覚悟をきめていた。

樹林帯を抜けると烈風が襲ってくる。体重の軽いあっちゃんとミキが吹き飛ばされそうになり、必死に耐風姿勢をとっている。冬山訓練で練習した基本姿勢を忠実に実行している。カトも真剣に強風と闘っている。メタボ岳人の私は体重の分だけ安定感があるようだ。さあ、これからが那須名物、強風のお祭りさ。ちよいとイジめてやろうか。

「耐風姿勢をいつまで続けていても前には進めねえぞ」などと指導しようと思っていた時、峠までの中間点道標を風よけにしていた一人の青年に出会う。同行者が滑落したようで、仲間が探している間ここで待っているという。

指さす方に行ってみると、もう一人の男性が「強風で仲間が崖から落ちた。それを探しているが見つからない」という。滑落者のピッケルがそのまま残っていた。風に注意しつつ断崖を見下ろす地点まで移動すると、十メートル下の岩の基部に赤いウェアの男性がうずくま

っていた。教わったその人の名前を大声で呼びかけると、手をあげて反応する。捜索者はザイルを持つが懸垂下降は無理のようだ。私のお助けヒモでは短くて役に立たない。

登山道に戻りわがパーティの行動を直ちに中止し、救助活動に当たることになった。ちょうどそこへ、朝日岳西稜のバリエーションルートを狙うが強風で諦めたという三人が通りかかったのだ。せつば詰まった話し合いの後、三パーティ九人による救助チームが結成された。

事故パーティで捜索をしていたM氏をチームの総隊長に選出、わが隊のミキがその場からすぐ警察に救助隊を要請した。そして彼女とあっちゃんは登山センターまで下山、連絡を担当しつつ救助隊を待ち、七人が救助活動に当たることになった。

岩壁に近づき灌木に手際よく支点を作り、クライマー二人が懸垂下降、けが人の所までおりて確保、すぐに手当てを始めた。これを見届け、私は次の行動を起こそうとその場を離れた。その瞬間……

突然、強風。ピッケルで支えてしのぎ、一歩踏み出す。再び突風にあおられ虚を突かれる。転倒。そのまま雪の上を流される。ハングした岩から滑落。宙に舞っている一瞬「死ぬってこんなこ

HIKER'S

「再び自然の中へ」

www.hikers.co.jp
弊社のオンラインショップはリアル在庫です



G.C. ハイカースは1980年、シェラネパダを望む小さな町で生まれました。カリフォルニアに自社倉庫と現地スタッフを有し、厳選したアウトドア用品を日本へ直送。



GC ハイカース

Tel: 0568-43-0819

Fax: 0568-43-0890

とか」と思う。

ドサツ。息を大きく吐き、すぐに立ち上がった身震い。自分の足元を確認し、体を見回す。なんともない。

「二次遭難にならなくて本当に良かったよ」「一回転して、着地満点だったよ」とリーダーの男性が救急車出発後に笑顔で話していた。雪の上に落下したのが幸いし、ピッケルで自らを傷つけることもなかったのだ。なんという幸運なのだろう。

懸垂下降してきたもう一人の男性と、無傷の私がそのまま人が付き添うことになった。初期救護を施した二人はルート捜索に出かけていった。

六十五歳のKさんは出血はないが、しきりに胸の痛みを訴えている。保温のためツェルトでくるみ、風の弱い岩陰に移動、三人で救助隊を待つことになった。

以下、私の山行メモ ……えんえん四時間、救助隊が来るまで三人で待つ。胸が痛くて苦しそう。タバコを吸わせてやると落ち着いてくる。ツェルト内で声をかけ続ける。再びクライマーとM氏がやってきてけが人に合流。やっと救助隊十名ほどがカトやK君（一人）で待たされていた青年を連れて上がってきた。十五時、タンカに滑落したKさんをのせて下山。センターにミキとあつちゃんがいいた。ずっと暇だったという。大丸の現地本部で警察から聞き取りを受ける。当事者隊、救出の立役者「S登高会」の皆さんと握手して

無事を喜ぶ。十七時三十分帰京の途につく。長い一日だった。自分の技量以上のことはしない。肝に銘じておこう……。

翌日M氏から電話があった。旧黒磯市内の病院に入院したKさんは「鎖骨や肩などを骨折、さらに背骨も検査中」とのことだ。「私が気が動転している時あなたが来てKを発見した時はどんなに嬉しかったことか。その後も冷静にきばきと判断して頂き、たいへん助かりました。ありがとうございます」

あつちゃんとミキに下山を命じた時彼女たちの安全をリーダーとして確認したのか。チームが救助活動を始めた時

今月の寸評

遠藤甲太Ⅱ文

《黄色の和菓子のような（略）まあるい花房が何百と集まって》咲くミツマタってどんな花だろう？ にわかに興味を覚え、早速図鑑を繰こうとしたが、金花は黙って野に咲いておればよいのであって——とも遠山氏が記しているし、写真などでその姿を訪ねるのはやめた。作者の文字による描写だけで、幻の花姿を想うにとどめたほうが、ひょっとすると読み手としては、上等なのかもしれない。一読熟年御夫婦の、何気ないお花見登山にすぎないのだけれど、この紀行は、あつたかいなあ。ミツマタの優しい花と、長い年月つれそってきた奥様のイメージが、ぼくにはなん

崖の上でなぜ私はセルフブレイを怠ったのか。救助者自身が滑落するとは、技量不足の一語に尽きる。遭難者を助ける前に自分を助けよ。

その晩、カトが会のホームページの掲示板に書き込んでいた。「帰宅後良い酒を飲んでいる。滑落者の確認、確保、救援要請などリーダーの英断で優先。日本人口が一人減らなくて何よりであった。人間とは自己を犠牲にしてひとつの目的のためにこんなにも献身的になれるものか。下界でもこんな気持ちで暮らしたい」

天は自ら助くる者を助く。
私はどのような天に助けられたのだろうか。（二月十五日）

となく重なつて見えました。

一方、人見氏の緊迫感あふれるノンフィクション。こいつは彼にとつては、あきれるほどの好運な事件。フツーなら二重遭難を免れぬところでした。きつと日頃の心懸けが、まっことよかつたのでしよう。まずはメデタシ。しかしながら、馴れぬ遭難救助に参画する際は、よっぽど自制して、まずは自己防衛を完璧にせねばならないのを、読者にも実感させずにはおかぬ、そんな貴重な一文でした。なお人見氏は97年1月号で当欄にデビューして以来の御常連寄稿家、山ばかりでなく書き手としても、相当なウエテランです。

読者紀行投稿要領

- 対象Ⅱエッセイ風な部分があっても結構ですが、基本は紀行文スタイルの作品のみ。論評や記録、ガイド文は対象外とします。
- 投稿要領Ⅱ本文のみで、原稿用紙縦書き一枚20字×20行を8枚程度です。ワープロ原稿の場合は、フロッピーやCD-Rにテキスト形式でデータを保存して同封してください。難読漢字にはルビをふってください。別紙に作品タイトル・氏名・年齢・住所・電話番号・（必要なら）ペンネームを明記のこと。メールでの投稿も可。
- 選考Ⅱ遠藤甲太が、スタッフと協議のうえ選ばせていただきます。すぐに作品が載らなくても、あとになって掲載される場合もあります。
- 応募規定Ⅱ作品は未発表のものに限ります。他誌との二重投稿もご遠慮願います。原稿は返却できませんので、コピーをおとりください。採用分には掲載号発売の2カ月後に規定の原稿料をお支払いします。
- 投稿先Ⅱ〒107-8410 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル1階 山と溪谷社 山と溪谷編集部「読者紀行係」
メールⅡ readers@yamaki.co.jp

山の俳句・山の短歌 投稿要領

- 対象Ⅱスタイルにとられない自由な投稿を期待しています。「山」にかかわることだったらなんでもOK。新人大歓迎。掲載は偶数月です。現在、09年8月号掲載の投稿を受付中で、09年5月15日消印で締め切ります。
- 応募方法Ⅱ郵便はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号を明記し、ご自分がお読みになった3句（3首）と句作（作歌）場所コメントを記載してください。
- 注意事項Ⅱ作品は未発表のものに限ります。他誌との二重投稿はお断りします。はがきは返却できませんので、コピーをおとりください。なお、作品の掲載にあたりましては、一部、添削させていただく場合があります。ご了承ください。
- 投稿先Ⅱ〒107-8410 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル1階 山と溪谷社 山と溪谷編集部「山の俳句・山の短歌係」